

Title	ポルトガルのペスト養生訓
Author(s)	林田, 雅至
Citation	大阪外国語大学学報. 72(2) p.27-p.39
Issue Date	1986-11-28
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/81117
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ポルトガルのペスト養生訓

ポルトガル・ブラジル語学科

林 田 雅 至

O regimento português contra a peste

O Regimento de Johannes Jacobi(1357)(versão portuguesa traduzida de 1495 a 1496 por Frei Luis de Rás) e o capítulo LIV, cujo título é Das razões por que me parece bem fugir a pestilência (Do Leal Conselheiro de D.Duarte em 1438), constituem os primeiros regimentos portugueses contra a peste(Literatura médica antipestosa) depois da Peste Negra(1347-52) que chegou em Portugal no ano de 1348.

O pensamento básico dos dois regimentos é exclusivamente uma perspectiva religiosa e cristã, e ainda continuava vivo, sobretudo entre o povo, pelos fins do século XIX, embora Ricardo Jorge tivesse reconhecido em 1899 um bacilo(contagium animatum), *pesteurella pestis*, o causador da peste, descoberto por A.Émile Jean Yersin.

・序論

1347年から'52年にかけてヨーロッパで席捲した黒死病が当時の人々に与えた恐怖感は、今日からすると測り難いものがある。その恐怖感は主として近代医学的な意味で原因が不明なこと、その結果対処療法が存在しないことから生まれる。⁽¹⁾以降19世紀末に至るまでずっと500年間ヨーロッパで決定的な医学上の対策は見出されない。19世紀90年代になってようやく、北里・イェルサンがそれぞれ独立にペスト菌を発見するのである。⁽²⁾

ヨーロッパでペストの歴史研究は盛んであり、古典的な文献としては、J.F.C. Hecker, *Der schwarze Tod im vierzehnten Jahrhundert*, Berlin, 1832. G.C. Coulton, *The Black Death*, New York, 1930. A. Pollitzer, *La Peste* (W.H.O. Monograph Series, nº22), Genève 1954. を上げることができ、⁽³⁾また黒死病病理・治療学(養生術)概説書としては Jaine Bazin, *L'évolution du costume de Medecin de Peste en Europe de 1348 à 1720* (Diplome d'Etat), Paris, 1971. がある。⁽⁴⁾

最近日本でも一般向けのペスト概説書『ペスト大流行—ヨーロッパ中世の崩壊—』(岩波新書,

225, 1983) が村上陽一郎氏によって上梓されている。さらに、木村尚三郎他編『概説フランス史』(有斐閣選書), 有斐閣, 1982. では第9章が「病気の社会史」にあてられ, そこでは特に伝染病を論じ, まず筆頭にペストを取り上げている。また, 二宮宏之他編『医と病い』(アナル論文選3), 新評論, 1984; 立川昭二『病いと人間の文化史』(新潮選書), 新潮社, 1984; マルセル・サンドライユ他著, 中川米造・村上陽一郎監訳『病の文化史』, リブリポート, 1983. の出版も忘れてはならない。

この論文では社会史的な側面から, ポルトガルの歴史的社会的枠組の中で, 人々のペストへの対応をできる限り実証的に論じ, ペストと社会の関係を考えてみる。

基本的な文献として, Mário da Costa Roque, *As pestes medievais europeias e o regimento proveytoso contra ha pestenença* Lisboa, Valentim Fernandes [1495-1496] (Fundação Calouste Gulbenkian), paris, 1979. に負うところが大きかった。

この書はヨーロッパ全体の中でのポルトガルを論じたもので, ポルトガルのペスト養生術史(防疫措置・環境衛生対策)と, 『ペスト養生訓』(1495-96)が上梓されるまでの経緯を含むヨーロッパにおける『養生訓』一般の誕生史をその主要なテーマとしている。

・本論

中央ヨーロッパで1347年から'52年にかけて発生した黒死病の波が, 1348年春から'49年にかけてポルトガルに押し寄せる。人口の30-35%が減少したと伝えられる。⁽¹⁾

近代医学的な合理的説明付けが施されぬまま19世紀90年代まで人々の恐怖感は癒されることなく続いたわけだが, 当時は当時なりに何とかして合理的に説明しようとする努力が見られた。そこで, ペストに関する当時の合理的な説明を示すため, 次の2書を手がかりにしてみる。

1. Johannes Jacobi (c. 1315-84) 『黒死病養生訓』1357 (ポルトガル語版 *Regimento proueytoso contra ha pestenença*, Frei Luis de Rás (?-1521) 訳 1495-96.)⁽²⁾

2. D.Duarte 『忠実なる顧問(Leal Conselheiro)』1438.⁽³⁾

まず第1の書を見よう。

作者の Johannes Jacobi は, 後年モンペリエ医学校の学頭(在職1364-84)を務めることになるが, 1348年当時モンペリエを襲ったペスト流行の際, 病人宅を一軒々々往診し, 悪疫と闘う病人看護の実地体験を生かして, この養生訓(5-6葉立ての4つ折り小冊子)を物した。⁽⁴⁾

この書は瞬く間に評判を得, 換骨奪胎した翻訳写本が続々と現われる。約100年後丁度揺籃期本の頃合, 現スウェーデン当時のデンマーク連合王国 Aros 市(現 Västerås)の司教 Canute (?-1462)が、この『養生訓』を藍本とするテキストを世に出す。これも大変な勢いで西ヨーロッパ諸国に流布し, ラテン語版だけでなく, ロマンズ諸語版も出版される。⁽⁵⁾ フランシスコ修道会士であり, 後にリスボン大学で自然学・神学・論理学の講座を担当することになるFrei Luis de Rásは, ポルトガル人読者を考慮し, 1495-96年 Canute 『養生訓』のポルトガル語版を上梓する。⁽⁶⁾ これ

が Johannes Jacobi のテキストとポルトガル語版の関係である。

養生訓は5章から成っている。まず各章のタイトルを紹介しよう。第1章：ペストの諸徴候，第2章：ペストの諸原因，第3章：ペストの諸良薬，第4章：心臓及び四肢に活力を与える術，第5章：瀉血療法。⁽⁷⁾

それではそれぞれの章の内容を簡潔に，また興味を引く部分をクローズ・アップして整理してみる。

第1章では，6つの諸徴候が記述されている。

第1の徴候は，夏及び真夏日の朝方の天候の変化である。その変化とは，多くの場合雨がちで，霧が濃いと思われる天候時に風が吹くという気象上の変化であり，主としてその風が南風あるいは南の星の方から吹く風の時である。⁽⁸⁾

第2のそれは，第1の徴候で見た夏の日，雨が降りそうで降らない天候時に，多くの場合日中空が暗くなる，あるいは暗くなるように見える時である。⁽⁹⁾

さて第3の徴候は，次章にも関連することだが，後述するミアスマ及び天空の状況によって汚れた大気に発生する大量の蚊がその徴候である。⁽¹⁰⁾

第4のそれは，彗星出現というもので，中世以来の伝統的な占星術の観点に基づく。⁽¹¹⁾

第5の徴候は，稲妻・雷が大低正午即ち南の方角から発生するというものであり，第6のそれは正午（南）の方角から汚れた有害な大風が吹くというものである。⁽¹²⁾

これらの徴候はすべてペスト襲来を告げる。しかし，全能の神がその徴候出現を妨げないとすれば，と条件が付いている。⁽¹³⁾ 神の仲介なくしてペストは発生しないのである。

それぞれの徴候が全く独立した価値を持つと考えるのは難しい。しかし，これら徴候の有機的相互関連性の構造がどのようなものかについては，今後研究を進める必要がある。今の所，早急な結論は差し控えておく。

第2章では3つの原因が上げられる。

1番目は，液体病理学的な観点⁽¹⁴⁾によるミアスマ説である。ミアスマとはよごれというほどの意であるが，多く局地的ないし局所的に有機物，特に埋葬されない人や動物の死体，の腐敗や頽化，沼沢，溜り水等から発生するものと考えられ，これによって汚染された空気をペスト発生・流行の原因に擬するのである。これは「此岸下位の根源」と呼ばれる。⁽¹⁵⁾

2番目は，天空状況原因説で，目下私はこの説が具体的に何を指すかを判じかねている。ともかく天空状況によって，やはり大気が汚染され，人体にも害を及ぼす。やや具体性を与えてくれるのは，第1章，第4の徴候に見える占星術的な観点である。天体の運行（この書には見えないが，日食・月食に代表される食現象，惑星の近接，土星の影響が伝統的に当時ペストの原因と考えられていた）が天空状況の1つとしてペスト発生に関連付けられる。この2番目は「彼岸上位の根源」と命名されている。⁽¹⁶⁾

またこの両者が2つながらともに大気を汚染し，ペストを引き起こすと考えられた。この合成版

が3番目の原因である。⁽¹⁷⁾

第3章に移ろう。この章でまず取り上げられるのは、人の罪の懺悔・告白で、これはペスト対策の最良策とされている。この対策の根底には旧約の2書がある。旧約聖書「サムエル記下」24章及び「歴代志略上」21章である。⁽¹⁸⁾ その概略を見てみよう。

ダヴィデの人口調査という神への不信行為（聖戦の原理が生きていて、王が兵力を数えることは神への不信を示す）＝実は、神の経綸の器サタンによる試練→神の憤怒→主の使のつるぎによる疫病（3日で7万のイスラエル人死亡）→主の使、ダヴィデの先見者・預言者カデに主への祭壇を建てるよう命じる→ダヴィデ、主への祭壇築造、燔祭・酬恩祭を捧ぐ→主の命で、使はつるぎを鞘におさめ、疫病は停止する。

この概略を図式化すると次のようになる。

罪→神罰（疫病）→贖罪（主への祭壇築造、燔祭・酬恩祭）→赦罪（疫病止む）

疫病をペストに、主への祭壇築造、燔祭・酬恩祭を罪の懺悔・告白に、それぞれ置き換えることによって『養生訓』のここで言う最良策を理解しておけばよい。

そして次にミアスマあるいは天空状況による大気汚染区域＝ペスト流行地域から逃げる事が勧められる。しかし、多くの者が物質面の多大な損失を蒙ることなく逃げることはできないのが現状だから、人は汚染区域にとどまってペストの諸原因、即ちミアスマ及び天空状況による汚染大気を最大限避け、遠ざけなければならないことになる。例えば、ミアスマ・天空状況による汚染大気を運搬する風とみてよい第1及び第6の徴候の南風を室内に入れないように南向きの窓を閉める、といった具合に。⁽¹⁹⁾

また汚染された大気を浄化するために火が用いられる。⁽²⁰⁾

聖書を典拠にする時（「レビ記」21：9；「民数記」26：10；「申命記」32：22；「ヨシュア記」7：15等）、火は浄化のための浄火の形をとった神罰と考えられる。

人の罪に応じて浄化のための浄火が神罰として下ったと考え、それは人の罪を贖うだけでなく、ペストの原因＝汚染大気をも浄化し、その存在価値を失なわせてしまう。

一方、汚染大気が人体に害を及ぼし、ペストを引き起こすことのないように薫香をたくことが勧められる。⁽²¹⁾

《ゲッケイジュ（ローレル）、⁽²²⁾ ジュニパー（杜松）、⁽²³⁾ ハナハッカ、⁽²⁴⁾ ヒソプ、⁽²⁵⁾ ヘンルーダ（芸香）、⁽²⁶⁾ マヨラナ、⁽²⁷⁾ アロエ（沈香）、⁽²⁸⁾ ニガヨモギ⁽²⁹⁾ といった芳香を放つ草木を燻らせば、薫香が鼻口を通して体内に入り、五臓六腑は強くなり、丈夫となりましょう》⁽³⁰⁾ と書かれている。

やはり聖書を典拠にすると、薫香は主の前に供えるべきもので、贖罪の効験があるとされている。「民数記」（16章42-48）から一部を引用してみよう。

イスラエルの人々のモーセ、アロンに対する逆らい（16：42）により、主は怒りを発し、疫病を

流行せしめる。《そこで、アロンは、モーセの言ったように、それ〔火ざら〕を取って会衆の中に走って行ったが、疫病はすでに民のうちに始まっていたので、〔火ざらに火を入れ〕薫香をたいて、民のために罪のあがないをし、すでに死んだ者と、なお生きている者との間に立つと、疫病はやんだ。》(16: 47-48) * [] は私が補足した。

人の罪によって汚染大気はペストの原因とみなされているわけであり、薫香が人の罪を浄化してしまえば、罪に対応する神罰ペストが汚染大気によって此岸の世界に発生することはないのである。罪・罰の論理の中で取り扱われている汚染大気は、人の罪が存在する場合のみ神罰ペストの原因たり得るからである。

第4章で注目しておきたいのは、心・精神の平穏による対処療法である。⁽³¹⁾ 楽しく、心から満悦していることが、何よりも健康のための良薬である、⁽³²⁾ と書かれている。

この精神的安定感は、贖罪後の解放感と通じるものがあるとみてよからう。

最終章では、瀉血療法が取り上げられる。⁽³³⁾

瀉血(静脈切開)とは、液体病理学理論に拠って病いの原因である不調の体液を排除する療法で、この章では、刺絡がどの部位で行なわれたらよいかという技術的方法論が説かれる。近代医学的に全く治療効果を欠いていたのは言うまでもない。次の説明からも分かるように、ペストの治療については瀉血だけに限定されない。⁽³⁴⁾

ペスト患者の不調体液は《3つの高貴な内臓(脳、心臓・肺、及び肝臓)》に浸透し、やがてそれぞれの内臓に呼応すると考えられ、排泄器官として機能する神経節に排泄される。次に神経節はその体液を受けて腫れ、化膿する。この化膿部位を切開することによってよごれた体液を体外に流出する。また、体液の浸透した内臓に血液を導く静脈が切開され、よごれた体液はやはり排除される。⁽³⁵⁾

これまでの5章全体を締めくくる意味で次の言葉がある。

《以上のことを知っておけば、ペスト対策として十分であろうし、主イエス・キリストの御力の下この小冊子の教える手段・方法に従い、自己管理をすれば、誰れでもペストの多くの危険からのがれられよう。主の御力なくしては、健康は存在しない》⁽³⁶⁾

ここまで『養生訓』の内容を章ごとに追ってきた。先にも書いた通り、ペスト諸徴候相互の有機的連関性ははっきりしていない。また、その諸原因、特に天空状況説はまだ詳びらかではない。さらに諸原因と諸徴候の関連性についても明確な説明を施すことができない。

牽強付会な即断は差し控えるとして、確かと思われる所を総合分析してみることにする。

対ペストの最良策が罪の懺悔・告白でありその図式的理解は既に見た通りである。心・精神の平穏、火・薫香による処置法もこのキリスト教的論理に則って解釈できる。また瀉血療法も《化膿は悪いものを体外に流出する》と本文にあるのを、生ける山羊に罪を背負わせ、荒野に放つユダヤの罪祭(次書を取り扱う際詳述する)になぞらえて、ペスト患者の罪(悪いもの)を化膿に負わせ、排除すると読めなくはない。先の図式で言えば、贖罪の部分に相当する。

『養生訓』をキリスト教的パースペクティブから次のようにまとめておこう。

人間の健康を掌る神は、人に罪が認められた場合、神罰の1つの形態としてペストを下すのであるが、視覚的にまた触角的にさまざまな徴候を神罰の前兆として人間に示し、ペストの諸原因（ミアスマ説・天空状況説）によってペストを流行させる。人はその対応策としていろいろな形で贖罪行為（罪の懺悔・告白、火・薫香、瀉血療法、心・精神の平穩〔この最後は正確に言えば、贖罪後の解放感＝精神の状態を示している。ここでは内的に贖罪行為を含むと考える。〕）を行なって、神の赦しを得る。

以上のペストに関する当時流儀の合理的解釈を罪・神罰説としよう。簡略に図式化すれば、次に示す通りである。

罪⇒神罰⇒贖罪⇒赦罪

ただ疑問が残るのは、贖罪行為のうち、何故に罪の懺悔・告白が最良策とされたかということである。また、汚染区域から逃げることの意味づけについてここでは一切触れなかったが、それは故あってのことで、次の D. Duarte の書の中で取り扱うつもりである。

次の書に移ろう。

D. Duarte はポルトガル 第11代国王（在位1433-38）であるが、母 D. Filipa de Lancastre (1359-1415) を黒死病で失ない、一方 Batalha 修道院で執り行なわれた父 D. João I (1385-1433) の葬式にもその地に流行していた黒死病のため列席できない。生前数度にわたってペストを経験し、その恐ろしさを十分に知っていたはずである。彼自身、性状明らかならぬ疫病の犠牲となって他界する。1438年、死の直前上記の書を執筆する。⁽³⁹⁾ その第54章のタイトルはこうである。《黒死病の対応は逃げるにしかず、と考えるその諸々の理由について》⁽³⁸⁾

この章は D. Duarte が《ペストから逃げるのはよくない》という4つの意見をそれぞれ吟味・分析・反駁していくスタイルをとっている。まず4つの意見を箇条書きに紹介しよう。

1. ペストは神の摂理に基づくものであるから逃げ隠れしても仕方がない。
2. 逃げる者は具体的に何から逃れるかを知らねばならない。しかしこの場合本質的にその正体のはっきりしないペストから逃れても、結局は無分別な行動に終わってしまう。
3. すべての者が逃げてしまえば、世界は滅んでしまう。市町村は空っぽになり、田畑屋敷は放置され、荒れ放題になってしまう。
4. 患者を見舞い、死体を埋葬し、苦しむ者を慰めるといった慈善事業を最も重要な義務として遂行すべきである。⁽³⁹⁾

この中で、1番目の意見への反駁が焦点である。

聖書中、イエスの40日40夜の断食後、悪魔がイエスを聖なる都に連れて行き、宮の頂上に立たせ、次のように言う。「もしあなたが神の子であるなら、下へ飛びおりてごらんさい。『神はあなたのために御使たちにお命じになると、あなたの足が石に打ちつけられないように、彼らはあなた

を手でささえるであろう』と書いておりますから」と。イエスは「『主なるあなたの神を試みてはならない』とまた書いてある」と反論する（「マタイ伝」4：7；「ルカ伝」4：12）。

D. Duarte はこれを根拠にして、何もせずただただ神の摂理に依存し、奇蹟が起こってペストから救われるのを待つことを誠しめる。むしろ医者⁽⁴⁰⁾の忠告に従うことを勧める。《手遅れにならないうちに、迅速かつ遠隔地にペストから逃げる》というものである。⁽⁴¹⁾ この忠告とは、まず第1に常に我々を悪から守る神に希望を託し、神の恩寵を受ける一方で、神が人間に授与した善悪の判断力・分別を最大限生かす自らを助ける行為、自己の生命を守る最良で、最も確実な道である、と D. Duarte は言う。

ここで注目したいのは、ペストが悪の概念で捉えられていることである。D. Duarte が引用した次の例を見る時、これがはっきりする。

主の弟子たちへの言葉：《1つの町で迫害されたなら、他の町へ逃げなさい》（「マタイ伝」10：23）⁽⁴²⁾

また、ヘロデ王の嬰兒殺しに際してヨセフ、マリア、その幼な子がエジプトへ逃避行することを扱った「マタイ伝2：13」。⁽⁴³⁾

聖書に基づく《迫害》の意味は、神によりたのむ敬虔なもの（神につく善人）に対して神をおそれることのない不敬虔なもの（神にそむく悪人）が、不当な敵意を抱いて執拗に加える圧迫または危害であり、悪事そのものに他ならない。⁽⁴⁴⁾

D. Duarte は ペストを迫害に喩え、《逃げる》ことを勧めている。

加えて、ソドムの罪惡に対する神の怒りが下る時、神がロト（アブラハムの甥）に命じて逃がれさせる件り—— 実際旧約新約を通じて、ソドムは罪惡と、これに対する神の刑罰の鑑として引用される（「申命記」29：23；「イザヤ書」1：7，9-10，3：9，13：19；「マタイ伝」10：15，11：23-24；「ルカ伝」10：12，17：29。等）——が本文で語られる。ここではペストがソドムに喩えられる。⁽⁴⁵⁾ それ故、ペストが単に善の対立概念である悪とみなされているだけでなく、各人が責任を負うべき罪（神に対する不義）及びそれに見合う神罰の鑑とみなされていることが分かる。

続いてペストの原因論に言及してみる。4つの原因が上げられている。⁽⁴⁶⁾

1. 神罰^{*} 2. 天体運行（占星術的立場）

3. ミアスマ 4. 感染^{**}

^{*} 典拠は『養生訓』（第3章ペストの諸良薬）で見たのと同じである。

^{**} 生物伝染説の確立する以前の伝染源はおおむねごく短い作用半径をもち、もしも触れたら最後、病気は必発のはたらき手と理解されていた。このように、多くの人々が狭義な意味での伝染の契機を最早見逃がさなかったとしても、腐った空気あるいは毒を含んだ空気が患者から人に伝わるといった風の考え方（miasmatic contagious theory）が当時大勢を占めていた。⁽⁴⁷⁾ [^{*} , ^{**} は私が補足した。]

原因がいずれの場合であっても、まず常に我々を悪から守る神を忘れてはならない、と D. Duarte は言う。然しながら、また神が授与した善悪の分別を最大限利用しなければならない、と続ける。具体的に、過去の先例として、神の恩寵によって善人とされ、善悪の判断力・分別のある教皇・枢機卿その他高官がペストから逃げたことを挙げ、彼らにならって逃げることを勧める。さらに彼の同時代的経験によってこの勧告を強化する。その経験とは、ポルトガルに1年間ペストが流行した折、身分制議会コルテスに出席していた3000人は逃げることによって、そのわずか3人しか疫病の犠牲とならなかった、というものである。⁽⁴⁸⁾

付言すれば、2, 3, 4 は、D. Duarte に従えば自然的現象・原因である。しかしパラドキシカルに D. Duarte は原因の結果であるペストを既に見たように宗教的観点から眺めていることも注目しておきたい。

さてここで『養生訓』分析の際、手をつけなかったペスト対策の1つ《逃げる》ことをこの機会に考えてみる。

もう一度この行為について整理すると、D. Duarte によれば、罪悪の概念で捉えられるペストから逃げるという行為は、神にまず希望を託し、神の恩寵を授かる一方で、神の授与した善悪の判断力・分別を最大限生かす自己救済の最も確実で、最良の手段というものであった。

分析を試みよう。

「レビ記」16章にはユダヤの罪祭が記述されている。全国民の罪が生ける山羊に負わされ、主に敵対する力（悪霊）の本源（罪の源＝荒野に住む魔神アザゼル）に送り返されることによって罪の完全な除去が成就された。

ペストから逃げる者を物理的に固定して考えれば、ペストが遠ざかっていくと見ることができよう。逃げた者と反対方向に逃げた距離分だけ遠ざかるのである。罪悪を背負ったペスト患者（ペスト感染地域＝大気汚染区域）がその罪の本源であるアザゼルに相当するもの（具体的に何を考えていたかは分からないにせよ）に送還され、罪の浄化（贖罪）がなされたと読み取ることが可能であるように思う、ユダヤの罪祭のアナロジーによって。

このように《逃げる》という行為は、先に見た罪・神罰説の図式上、贖罪に位置付けることができる。

実際に《罪の懺悔・告白》という行為と《逃げる》という行為とを比較してみよう。

この2つの救済策の相違点は、前者においては、罪が告白者と聴聞僧の間で秘密裡に語られ、目に見えない形で消滅してしまうのに対し、後者においては、罪がペスト患者と目に見える形をとり罪悪の本源に送還されることにより贖罪が行なわれるのである。

これだけではどちらがより有効な手段であるか判別はつかない。両者とも論理的には等価値を有すると考えられるからである。しかし、少なくとも次のことは言える。後者から患者の隔離という手続きが開けてくる。当然この場合近代的な意味での伝染性が認識されていたのでは決してない。宗教的な「汚れ」を厳しく迅速にかつ遠隔地に遠ざける趣旨に出たものであったろう。しかし結果

において隔離は多数の健康者を未然に感染から守ったに違いない。⁽⁴⁹⁾

事実 D. Duarte はこの章中、隔離実践を勧告するが、それについては後述する。

以上2つの救済策を今度は『養生訓』のコンテキストの中で見てみよう。

『養生訓』では人の罪の懺悔・告白が第1番目の対策措置で、逃げる行為はその次に置かれる。逃げるのもよいが、多くの者が多くの物的損失を免れないから大気汚染地域（ペスト感染域）にとどまって対策を講ずるという内容のことが述べられていた。

ところが D. Duarte の書ではこの2つの対策の地位は逆転する。D. Duarte にとっては物的損失なく《逃げる》ことが可能であったのだろうか。逃げた過去の先例として教皇・枢機卿等が挙げられていた。どうやら両書の意見・立場の相違は階級差に基づくようである。《逃げる》ことはもともと医者への忠告である、と D. Duarte は述べた。当時医者は患者を置き去りにして逃げるのが習いであったし、節操ある医者が現地に留残って患者の病床で看護・手当てをすることは無分別な行動であり、間違い沙汰であった。⁽⁵⁰⁾

医者も含め王侯・僧侶階級といった有産階級＝知識・支配階級は田舎に別邸を持ち、経済的な側面から外国への避難旅行も可能であったろう。無産階級＝被支配階級には別邸などある筈もなく、逃亡旅行に出かけるだけの金銭的な余裕があったとは考えられない。大気汚染区域＝ペスト感染地域にとどまるより他に道がない。

以上から分かるようにペスト対応策に関して『養生訓』はより無産階級を対象としたものであり、D. Duarte の忠告はより有産階級を対象としたものであると言えよう。

さて再び冒頭に戻ろう。我々はここまで焦点の問題を取り扱ってきたにせよ、ペストから逃がれるのはよくないという1番目の意見と D. Duarte の反駁論を分析したにすぎない。以下2から4までの意見に対する D. Duarte の反論を見ておこう。

2. 夏に流行するマラリア熱はその正体かはっきりしないにもかかわらず、《逃げる》ことによって我々は身を守るのであるから、この病気に比べより一層危険であるペストから逃げるのは当然の義務的行為である。⁽⁵¹⁾

3. 統治・支配に結果として支障を来し、弊害を及ぼす良い忠告というものがある。禁欲・純潔（貞潔）はその例であるが、人が貞潔を守るとすれば、世界は100年のうちに滅び、禁欲的であろうとし、すべての所有物を手放すならば、統治は混迷を極めるであろう。この忠告は、実行する者の魂の救済にとって最も確実な道である。しかし、現実には必ずしもすべての者がこの忠告に従うことはない。同様に、ペストから逃げるという行為はたとえ統治・支配に悪影響を及ぼそうとも、自己の生命を守るための良い忠告として勧められよう。⁽⁵²⁾

4. ペスト流行地域にとどまる義務のある者に慈善事業を行なうことは託されよう。聴罪司祭及び魂の救済を業とする者。戦争の危険同様ペストの危険を耐え忍ぶのが似つかわしい騎士。また、市町村の管理・行政に携わる者。彼らがその任に当たればよい。⁽⁵³⁾

逃げないという1番目の意見への反論は、過去の先例、同時代的な D. Duarte の経験を確認と

しながら、ペストから逃げることの聖書的・キリスト教的な裏付け・正当化を計るもので、その意味で理論的中枢を構成する部分であると言える。一方、2から4までの反論は、この理論を基にしたより現実的な諸問題への解答である。2は他の病気との比較の形で、逃げることの正当性が示され、3は統治・支配の問題であるが、注目しなければならないのは、禁欲・貞潔の例で《現実には必ずしもすべての者がこの忠告に従うことはない》という箇所である。言外には、ペストから逃げるという行為も100%実行されることはないという意味があろう。だから、町が無人化したり、田畑屋敷が荒れ放題になることはない、と D. Duarte は暗に言いたかったのではないか。なぜならば、私見に従えば、逃げるという行為はより有産階級＝支配階級に即したものであったから。4においては、流行時に際しての現場の対応策が述べられる。聴罪司祭・魂の救済を行なう者は、患者の慰安・看護の他に、ペストが罪・神罰説で捉えられる以上患者の懺悔・告白を通して精神的治療を施したことは言うまでもない。ここで極めて我々の興味を引くのは、市町村の管理・行政に従事する者がとるべきペスト防止対策措置を D. Duarte が述べていることである。要するに、隔離の問題である。その内容は、ペスト患者を市町村外で治療し、死んだ者についてはその家を15日か20日程度閉鎖し、死体をやはり市町村外で埋葬するというものである。⁽⁵⁴⁾ 付言しておく、この措置はイタリア・ミラノのBernabò Visconti (1349-85)による市条令(1374年1月17日付)を踏まえたものである。⁽⁵⁵⁾ 罪悪の概念で捉えられるペスト患者、またペスト感染地域から逃げることは、ユダヤ罪祭の山羊を罪の本源に送還する贖罪行為と同義であってこれが契機となって隔離作業⁽⁵⁶⁾ が開けてくることを既に私は指摘しておいた。

さてこれまで2書を分析し、当時のペストに対するキリスト教的な見方・対処療法を眺めてきたわけであるが、この見方は次に挙げる『養生訓』のタイトルからも察せられる通り、19世紀においても健在である。

Remédio Maravilhoso para Alcançar as Misericórdias do Céu e Apartar de Nós todos os Males dos Flagelos da Justiça Divina, Peste, Fome e Guerra, Lisboa, 1832(4ª ed.) (『神の裁断による災厄(黒死病・飢饉・戦争)から私共を解き放ち、主の御恩寵を授かるための妙薬』)⁽⁵⁷⁾

また、同系列と考えられる Defeza Individual e Doméstica da Peste Bubónica. Instruções Práticas para uso do Público, Lisboa (『腺ペストから身を守る(実用教示)』)という『養生訓』が公にされたのは1899年であり、現在史料の上で確かめることのできる最後の養生訓である。⁽⁵⁸⁾

1899年疫学研究者 Ricardo Jorge (1859-1939)がポルトガスを席捲したペストの現地調査で、イエールサンの発見した病原菌を確認することをもって、⁽⁵⁹⁾ ようやく科学的な道が拓け、細菌性疾患に有効な医薬スルホンアミド剤が1937年、また抗物質ストレプトマイシンが1945年、治療領域に導入されて初めてペスト対策は緒に就くのである。⁽⁶⁰⁾

科学の開花が宗教的パースペクティブを消失せしめたのは間違いないとしても、数字の上で1899年をもって科学的な見方が宗教的なそれを一瞬にして駆逐したとは非常に考えにくい。一般民衆

のレベルで考えれば、宗教的見解消失のスピードは極めて遅いものであったろうし、つまり宗教的パースペクティブが尾を引きなかなか民衆の心を去らなかったであろうと容易に推測することができるのである。

註

序論

- (1) 川喜田愛郎『近代医学の史的基盤』, 岩波書店, 1977, p. 183.
- (2) 同上書, p. 1022; Mário da Costa Roque, *As pestes medievais europeias e o «regimento proueytoso contra ha pestenença»* Lisboa, Valentim Fernandes [1495-1496] (Fundação Calouste Gulbenkian), Paris, 1979 (以下この書はM. C. R.と略す), p. 16-17, p. 66-67.
- (3) 川喜田愛郎, 前掲書, p. 56 (文献); M.C.R., p. 18, 46, 73, 76, 85, 111, 114; 二宮宏之他編『医と病い』(アナル論文選3), 新評論, 1984, p. 31-50.
- (4) M.C.R., p. 50, 115, 154, 220.

本論

- (1) M.C.R., p. 117-40.
- (2) *ibid*, p. 269-438.
- (3) *ibid*, p. 141-47; D. Duarte, Leal *Conselheiro com actualização ortográfica, introdução e notas de João Morais Barbosa* (Biblioteca de Autores Portugueses), Lisboa, 1982 (以下L. C. と略す).
- (4) M.C.R., p. 271-94, p. 327.
- (5) *ibid*, p. 295-97.
- (6) *ibid*, p. 305-10.
- (7) *ibid*, p. 316.
- (8) *ibid*, p. 317.
- (9) *ibid*, p. 317.
- (10) *ibid*, p. 317.
- (11) *ibid*, p. 318; cf. M.C.R., p. 89-90, p. 146.
- (12) *ibid*, p. 318.
- (13) *ibid*, p. 318.
- (14) 液体病理学はヒポクラテス(B. C. 500頃-B. C. 428頃)において基本的性格が形成され, ガレノス(A. D. 129頃-199)によって思弁に墮し, 中世修道院医学の中で啓示的に解釈され, 体系・理論辯が目立つ解剖学不在のアラビア医学にその身を晒し, 典拠主義を抜本的特性とするスコラ学的方法で濾過され, 遂に実証学的性格はすっかり失なわれてしまい, 空想的演繹論理がその方法論となる。これがスコラ医学の完成(14-5世紀)であり, 広く黒死病養生訓の立脚する基盤でもある。
- (15) 川喜田愛郎, 前掲書, p. 184-85; M.C.R., p. 49-55, p. 319
- (16) M.C.R., p. 89-90, p. 146, p. 319-20.
- (17) *ibid*., p. 320.
- (18) *ibid*., p. 323.
- (19) *ibid*., p. 323-24.
- (20) *ibid*., p. 324.

- 21) *ibid.*, p. 324–25.
- 22) *louro*, *Laurus nobilis* (学名), 地中海沿岸原産。クスノキ科常緑小高木。葉・黒紫色の楕円形果実に芳香あり(月桂油)。
- 23) *junipero*, *Juniperus communis* (学名), 北半球温帯原産(東アジア北部に分布)。
- 24) *uberiorgano*, *Origanum vulgare* (学名), シソ科の多年草。
- 25) *hissopo*, *Hyssopus officinalis* (学名), ヤナギハッカ。ヨーロッパ原産。ハッカの一種。
- 26) *arruda*, *Ruta graveolens* (学名), 南欧原産。ミカン科の多年草(常緑低木)。
- 27) *Origanum majorana* (学名)。註24を見よ。
- 28) *aloes*。インド産の樹木ジンコウ(沈香, *Aquilaria agallocha*)から得られた薫香料。
- 29) *alosna*, *Artemisia absinthium* (学名), ヨーロッパ原産。キク科の灌木状多年草。乾燥した葉茎から精油をとり、アブサン酒をつくる。cf. *artamija*, *Artemia vulgaris*
- 30) M.C.R., p. 325. Johannes Jacobi『養生訓』からの引用である。M. C. R. の原典批判版(p. 316–39.)を使用している。ただし、この批判版は Fr. Luis de Rás のポルトガル語訳の原典批判版であって、M. C. R. は, *Regimento proueytoso contra a pestenença* (*Exemplar da Bib. Pública e Arquivo Distrial de Évora*)を底本としている。
- 31) M.C.R., p. 328–32.
- 32) *ibid.*, p. 332.
- 33) *ibid.*, p. 333–39.
- 34) 川喜田愛郎, 前掲書, p. 113.
- 35) M.C.R., p. 341–45.
- 36) *ibid.*, p. 339. 註30を見よ。
- 37) Joel Serrão, *Dicionário de História de Portugal*, Lisboa, 1971, vol. I. p. 855–57, vol. II, p. 63.
- 38) Cap. LIV *Das razões por que me parece bem fugir a pestilência*が原題である。
- 39) L.C., p. 270–71; M.C.R., p. 142–44.
- 40) *ibid.*, p. 271, p. 273.
- 41) *ibid.*, p. 270–76.
- 42) *ibid.*, p. 273.
- 43) *ibid.*, p. 273.
- 44) 桑田秀延他監修『聖書事典』, 日本基督教団出版局, 1961, p. 660–61 (sub voce 迫害)。
- 45) 同上書, p. 569 (sub voce ソドム); L.C., p. 273.
- 46) L.C., p. 275; M.C.R., p. 145–46.
- 47) 川喜田愛郎, 同書, p. 185, p. 1013.
- 48) L.C., p. 275; M.C.R., p. 146. この場合, コルテスの開催年並びにペスト流行年は1434年である。
- 49) 川喜田愛郎, 同書, p. 182–83
- 50) M.C.R., p. 225–26.
- 51) *ibid.*, p. 143; L.C., p. 271–72.
- 52) *ibid.*, p. 143–44; L.C., p. 272.
- 53) *ibid.*, p. 144; L.C., p. 272.
- 54) *ibid.*, p. 144; L.C., p. 272–73.
- 55) *ibid.*, p. 144–45, p. 170–71, p. 179. 条令の概略は次の通りである。僧侶階級はペスト発生・患者発見の即応的かつ義務的な通達を怠ってはならない。これを守せぬ者には, 全財産没収・火刑の厳罰が科せられる。ペスト患者は即刻に市外放逐, 市外療養, 死後市外埋葬されるといった対策が施されよう。
- 56) 隔離所(*Lazareto*)が防疫措置の機関としてスタートするのは, 1403年イタリア, ヴェネチアにペストが流行した時で

ある。アドリア海ヴェネチア^{ラヴェナ}礁湖に浮かぶ1小島に1249年聖アウグスティヌス修道会士の手で建てられた Santa Maria di Nazareth 教会が、収容所として使用されたことに端を発する (Nazareth>Nazaretum>Lazaretto)。ポルトガルにおいては、15世紀末葉、ポルト市参事会の文書に見える (1480年9月2日, 同年12月, 1487年12月 それぞれの文書) degredo が隔離所の前身であり、1565年、リスボン市議会は Trafaria の地に Lazareto を設ける。これが第一号の隔離所である。M.C.R., p. 173, p. 188-89, p. 192.

(57) M.C.R., p. 497.

(58) ibid., p. 237, p. 492.

(59) Ricardo Jorge. A Peste Bubónica no Porto, 1899; M.C.R., p. 20, p. 28, p. 497.

(60) M.C.R., p. 69-70, p. 237.